

長崎大学



教育学研究科
教職大学院ニュースレター

実践と理論の融合をめざして。長崎っ子らの輝きのために。

Nagasaki Graduate School of Education
Master of Education (Professional) Program

No. 5

2011.10.15



NAGASAKI UNIVERSITY

長崎大学教職大学院におかれても、実践力と応用力を備え、中核的、指導的役割を担う教師を育成するため、研究と実践を重ねられています。昨年は、「学び合うコミュニティを支える教職大学院の可能性」をテーマとした教育実践交流会を開催され、勤務校を離れて多くの教師が議論できる場を提供するなど、成果を上げておられます。

このように、教育の今日的課題に率先して取り組まれる長崎大学教職大学院に大きな期待を寄せるとともに、今後も互いに手を携えて、情熱に満ち、実践力と人間力に富んだ有為な人材の育成に努めていきたいと考えております。そして、一人一人の子どもを、社会で生き抜く、社会で役に立つ、自分の人生を豊かに過ごせる人間に育てたいと思っております。

長崎大学教職大学院におかれても、実践力と応用力を備え、中核的、指導的役割を担う教師を育成するため、研究と実践を重ねられています。昨年は、「学び合うコミュニティを支える教職大学院の可能性」をテーマとした教育実践交流会を開催され、勤務校を離れて多くの教師が議論できる場を提供するなど、成果を上げておられます。

このように、教育の今日的課題に率先して取り組まれる長崎大学教職大学院に大きな期待を寄せるとともに、今後も互いに手を携えて、情熱に満ち、実践力と人間力に富んだ有為な人材の育成に努めていきたいと考えております。そして、一人一人の子どもを、社会で生き抜く、社会で役に立つ、自分の人生を豊かに過ごせる人間に育てたいと思っております。

長崎大学教職大学院におかれても、実践力と応用力を備え、中核的、指導的役割を担う教師を育成するため、研究と実践を重ねられています。昨年は、「学び合うコミュニティを支える教職大学院の可能性」をテーマとした教育実践交流会を開催され、勤務校を離れて多くの教師が議論できる場を提供するなど、成果を上げておられます。

このように、教育の今日的課題に率先して取り組まれる長崎大学教職大学院に大きな期待を寄せるとともに、今後も互いに手を携えて、情熱に満ち、実践力と人間力に富んだ有為な人材の育成に努めていきたいと考えております。そして、一人一人の子どもを、社会で生き抜く、社会で役に立つ、自分の人生を豊かに過ごせる人間に育てたいと思っております。



長崎県では、本年4月から、「人が輝く、産業が輝く、地域が輝く長崎県づくり」を基本理念とした長崎県総合計画をスタートさせました。その鍵となるのは何と言ってもすべての基盤となる人です。このため、「人づくり」の中核を担う教育には、県民の皆様の大きな期待が寄せられています。

我が国に未曾有の被害をもたらしたこの度の東日本大震災では、被災された方々が混乱することなく互いに支え合って生きる姿が、世界の人々から賞賛され、感動を与えました。そして、避難所で献身的に活動されるボランティアなど、多くの方々への思いのこもった温かい支援の輪も広がりました。このような人間の生きる力や優しさ、これも教育によって育まれた力ではないでしょうか。

長崎県では、本年4月から、「人が輝く、産業が輝く、地域が輝く長崎県づくり」を基本理念とした長崎県総合計画をスタートさせました。その鍵となるのは何と言ってもすべての基盤となる人です。このため、「人づくり」の中核を担う教育には、県民の皆様の大きな期待が寄せられています。

我が国に未曾有の被害をもたらしたこの度の東日本大震災では、被災された方々が混乱することなく互いに支え合って生きる姿が、世界の人々から賞賛され、感動を与えました。そして、避難所で献身的に活動されるボランティアなど、多くの方々への思いのこもった温かい支援の輪も広がりました。このような人間の生きる力や優しさ、これも教育によって育まれた力ではないでしょうか。

長崎県では、本年4月から、「人が輝く、産業が輝く、地域が輝く長崎県づくり」を基本理念とした長崎県総合計画をスタートさせました。その鍵となるのは何と言ってもすべての基盤となる人です。このため、「人づくり」の中核を担う教育には、県民の皆様の大きな期待が寄せられています。

我が国に未曾有の被害をもたらしたこの度の東日本大震災では、被災された方々が混乱することなく互いに支え合って生きる姿が、世界の人々から賞賛され、感動を与えました。そして、避難所で献身的に活動されるボランティアなど、多くの方々への思いのこもった温かい支援の輪も広がりました。このような人間の生きる力や優しさ、これも教育によって育まれた力ではないでしょうか。

長崎県では、本年4月から、「人が輝く、産業が輝く、地域が輝く長崎県づくり」を基本理念とした長崎県総合計画をスタートさせました。その鍵となるのは何と言ってもすべての基盤となる人です。このため、「人づくり」の中核を担う教育には、県民の皆様の大きな期待が寄せられています。

我が国に未曾有の被害をもたらしたこの度の東日本大震災では、被災された方々が混乱することなく互いに支え合って生きる姿が、世界の人々から賞賛され、感動を与えました。そして、避難所で献身的に活動されるボランティアなど、多くの方々への思いのこもった温かい支援の輪も広がりました。このような人間の生きる力や優しさ、これも教育によって育まれた力ではないでしょうか。

長崎県では、本年4月から、「人が輝く、産業が輝く、地域が輝く長崎県づくり」を基本理念とした長崎県総合計画をスタートさせました。その鍵となるのは何と言ってもすべての基盤となる人です。このため、「人づくり」の中核を担う教育には、県民の皆様の大きな期待が寄せられています。

我が国に未曾有の被害をもたらしたこの度の東日本大震災では、被災された方々が混乱することなく互いに支え合って生きる姿が、世界の人々から賞賛され、感動を与えました。そして、避難所で献身的に活動されるボランティアなど、多くの方々への思いのこもった温かい支援の輪も広がりました。このような人間の生きる力や優しさ、これも教育によって育まれた力ではないでしょうか。

長崎県では、本年4月から、「人が輝く、産業が輝く、地域が輝く長崎県づくり」を基本理念とした長崎県総合計画をスタートさせました。その鍵となるのは何と言ってもすべての基盤となる人です。このため、「人づくり」の中核を担う教育には、県民の皆様の大きな期待が寄せられています。

我が国に未曾有の被害をもたらしたこの度の東日本大震災では、被災された方々が混乱することなく互いに支え合って生きる姿が、世界の人々から賞賛され、感動を与えました。そして、避難所で献身的に活動されるボランティアなど、多くの方々への思いのこもった温かい支援の輪も広がりました。このような人間の生きる力や優しさ、これも教育によって育まれた力ではないでしょうか。

STAFF 紹介

子ども理解・特別支援教育実践コース 笹山龍太郎

実務家教員として教職大学院に勤めて、早4年半が経ちました。現在、「発達障害児の理解と支援Ⅱ」「特別支援アセスメント事例研究」「特別支援教育の教育課程・授業論」「特別支援学校・学級経営論」「特別支援教育コーディネーター論」「生徒指導・キャリア教育の方法Ⅰ」「生徒指導・キャリア教育Ⅱ」の科目を担当しています。また、教職大学院の教育課程の核である教育実習の担当者の一として計画、運営、指導に関わっています。



私は、小学校の教員として18年間勤めていましたが、後半の9年間は特殊教育、そして特別支援教育に関わりながら、発達障害を含む障害のある子どもの指導を実践してきました。また、その後の4年間は長崎県教育庁において微力ながら県内の幼稚園、小・中学校、高等学校の特別支援教育の推進に携わってきました。このような教育現場や行政としての経験が、少しでも院生の指導に生かせればと思っています。

現在、幼稚園、小・中学校、高等学校においては校内委員会の設置や特別支援教育コーディネーターの指名がなされ、障害のある子どもへの校内支援体制の整備は完了し、特別支援教育の動向は、特別支援教育の視点に立った学級づくり、授業づくりになっています。子ども理解・特別支援教育実践コースの院生の実践研究テーマも「通常学級における特別な支援を必要とする児童への学級全体支援の効果」「ユニバーサルデザインを取り入れた国語科授業づくり」等、その動向を踏まえたものが多くなっています。院生とともに、先行的な実践研究について調べたり、実際に多くの小・中学校の教育の現状を見たりする中で、障害の有無に関わらず、全ての子どもに対して特別支援教育の視点に立った指導や支援を展開していく必要性を感じています。一方、障害のある子どもへの「個別の指導」についても、より専門性が求められるようになってきました。「根拠に基づく支援」と言われるように、的確な実態把握による精度の高い適切な支援が必要です。大学院の研究者教員の先生方と連携し、研究と実践の融合を図りながら、特別支援教育の視点に立った学級づくり、授業づくり、そして根拠に基づく個別の指導を追究し、院生の実践研究や教育現場の実際の指導に還元していきたいと考えています。

今後、幼稚園、小・中学校、高等学校の全ての教育の場で「特別ではない特別支援教育」「専門性の高い特別支援教育」が展開されることを期待しています。

学校運営・授業実践開発コース 寺嶋浩介

教育工学という分野を専門とする研究者教員です。教育工学は日本では1970年代頃から立ち上がってきた比較的新しい研究分野です。教育工学研究の対象とするところは幅広く、人間の学習過程を対象としながら、メディア等を利用して、実際の授業や教育改善に寄与することを目的として、その教育設計や研究方法を提案する学問です。



近年、私が特に関心がある実践研究テーマには、以下の3つがあります。

(1) 教育におけるICTの活用およびその普及

特に初等・中等教育の授業を対象とし、パソコン、プロジェクタ、実物投影機、電子黒板等のICTを活用した教育方法の開発や評価を行っています。また、学校現場の先生方と一緒に共同研究を進めたり、自身がアドバイザーとなって学校現場を訪問したりしています。

(2) 情報教育／問題解決学習のための学習環境デザイン

学習者が自ら学び、考え、協同的に問題解決を進めていくための学習環境デザインや学習者の心理的な側面に興味があります。広く、初等教育から高等教育までを対象とし、実践研究や学校現場との共同研究、基礎研究となる実験を通して、これらの問題に取り組んでいます。

(3) 教員養成・研修の開発と評価

教員養成や教員研修において必要なプログラムや学習方法の開発や評価を行っています。学校教員を対象とした講習や研修を業務として行っていますので、それと接続できればと考えています。

大学院の授業においては、個別の実践研究の指導以外に、「教育の方法と評価」（必修）、「授業研究の理論と実践」（学校運営・授業実践開発コース）を中心に担当しています。前者では、教育の評価に関する基本を講義や院生の実践紹介を通して学んだり（現職教員対象クラス）、授業設計の基本について学び、模擬授業を行ってもらったりしています（ストレートマスター対象クラス）。この授業では、教科教育を専門とする教員の特別講義や修士生との議論なども企画しました。後者では、実践研究報告書を執筆するために考えるべきことをおさえ、その計画を練ってもらったり、授業研究の基本的な方法を学んでもらったりする授業を実施しています。

「理論と実践の往復」というのが教職大学院のひとつのキーワードになっています。研究に足場を置きつつも、それをいかに実践に入れられるか、また実践から理論的な視点をどのように扱えばよいかをいつも考えています。

国際理解・英語教育実践コース 稲毛逸郎

教員養成のための教科内容学（教科専門領域）の新たな構築を目指して、いたるところで建設的議論が展開されている。国際理解・英語教育実践コースで開設されている専門科目においても、その理想を求めて、全ての英語教員が努力を積み上げてきていることは言を待たない。



しかし、である。院生諸君との授業で日々そういう努力をしつつも、何かしらすっきりしないものが常につきまとう。「英語による実践的コミュニケーション能力の涵養を目指して」というお題目の下、そこに全てのベクトルが収束するかのような幻想に苛まれるのである。

例えば、日本語の世界では、「富士山は高い」、「今度完成するスカイツリーはとても高いねえ」と、山であれタワーであれ「高い」という表現で済ませることができる。他方、英語の世界では、'Mt. Fuji is very high.' 'Skytree is very tall.' と、high と tall を使い分けるのが通例である。なぜかと手元の辞書で確認してみる。'High is used for talking about things whose top parts are long way from the ground. Tall is used to describe trees, buildings or other things that are narrow, or more high than wide.' (Macmillan English Dictionary, 2002). なるほど、high は地面から頂上までの距離が長く、かつ、頂上に視点が当たっているという語感で、tall は底辺（底面積の狭さ）と同時に垂直方向の距離に目をやり、それがことさらに長いことを表す、という語感がつかめてくる。つまり、英語では同じ「高い」と表す場合でも、底辺（底面積）と高さの比を意識するかしないかで、表現方法を変えているのである。

まさに目からウロコである。われわれ日本人は、母語である日本語の世界で、感覚や直観的判断をまとめあげる思考（一次的思考）を無意識のうちに行っている。と同時に、一人の人間は、一つの母語を通じてしか、各々の個性を持った人間の基礎を築けない宿命を負っている。だからこそ、人間の成長にとって母からの乳離れが必要であるように、母語の枠をつき崩して新たな思考と論理の領域を築くことが重要な意味を帯びてくるのである。外国語を学ぶことにより、母語による一次的思考を包摂するような、より大きな、別な次元の思考が芽生えてくるのではないだろうか。これこそが、また別の意味での外国語学習のきわめて重要な効用であることを忘れてはなるまい。

まずは、目標とする外国語の真の実力をつけることから始めなければならない。英語という言葉をより真剣により深く学び続けるという点においては、英語教師を目指す院生諸君も、教える側の教員も、立っている土俵はみな同じなのである。

そろそろブラッシュアップかな？

大学院への入学を希望される皆様へ

本大学院では、大学学部卒業生をはじめ、現職の先生方が在職のかたちのままで学んでいらっしゃる場合があります。当ニュースレターに記載されているように、学ぶ意欲に満ちた方々の積極的な入学をお待ちします。

専攻

- 1 教職実践専攻（教職大学院）
……募集人員20人
専門職学位が取得できます。この専攻には次の4つのコースがあります。子ども理解・特別支援教育実践コース、学校運営・授業実践開発コース、理科・ICT教育実践コース、国際理解・英語教育実践コース。

- 2 教科実践専攻
……募集人員18人
修士が取得できます。この専攻には次の4つのコースがあります。言語文化と社会の教育コース（国語専修免許プログラム、社会専修免許プログラム）、教理の教育コース（数学専修免許プログラム）、生活と身体の教育コース（技術専修免許プログラム、家庭専修免許プログラム、保健体育専修免許プログラム）、芸術と文化活動の教育コース（音楽専修免許プログラム、美術専修免許プログラム）。

試験期日

平成24年度の一般選抜は10月初旬の予定

出願期間

1年で修了する1年プログラムの希望者は8月初旬、2年あるいは3年で修了する2年・3年プログラムの希望者は9月初旬の予定

詳しくは下記に問い合わせください。
問い合わせ先：長崎大学教育学部学務係
〒852-8521 長崎市文教町1番14号
電話 095-819-2266

教職大学院の取組を開かれたものとし、活発な議論の場を提供する。そして実践と理論の融合を図りながら、高度な教育力のあり方を探る試みです。

8月17日から18日にかけて2日間にわたり開催しました。

2011.
8.17



教育実践研究コミュニティながさき

パネル展示による研究成果の経過報告を中心としたディスカッション、情報・意見交換

子ども理解・特別支援教育実践コース

江口真理子 中島佐和子 蔭山悦子 岩永久子 箱崎史郎 中島和彦

学校運営・授業実践開発コース

藤 修 内野大介 野口亮介

理科・ICT教育実践コース

近藤 潤 根津正二郎 宮田貴光 東 貴宏

国際理解・英語教育実践コース

平山陽子 谷本麻希 藤本健太郎

基 調 提 案

特別支援教育が始まった当初は、「特殊教育ではなぜいけないのだ」「なぜ変える必要があるのか」などの発言が多く見られた。しかし、十年が経ち、特別支援教育の理念や基本的な考え方の理解が進んできた。通常学級のユニバーサルデザイン化もその一つである。障害のある子どもへの教育を充実させていくことが、障害の有無に関わらず全ての子どもへの学力の向上につながっていく。このような特別支援教育の良さが浸透してきた。また発達障害に関する研究が活発に行われている今日、指導方法や対応方法などの教材教育データの開発が進み、エビデンスに基づいた指導や支援を行うための教材を簡単に入手することができるようになった。このような現状から、発達障害についての理解が進んだと言える。このように特別支援教育に対する理解が深まったことに合わせて、校内委員会や特別支援教育委員会などの校内支援システムの構築が進み、より効果的な指導・支援を行うためのシステムとして機能し始めている。その中で、特別支援教育を推進するキーパーソンである特別支援教育コーディネーターという仕事が、責任も重いが一層魅力的な仕事になってきた。

次は展望について述べていく。到達点の中で、エビデンスに基づいた教材教育データを入手する環境が整ってきたとしたが、それを現場において十分に活用できていないと感じる。「なぜこのような指導をしているのですか？」と尋ねられたときに、しっかりと自信を持って答えることができなければならぬ。そのために、子どもの学びや行動の確かな把握を行い、そこからエビデンスに基づいた、根拠のある、効果のある指導・支援の計画を立て、実施していく必要がある。また発達障害の二次的障害の予防や自尊感情への配慮、学級崩壊の予防について、発達障害だけの特性から考えていくのではなく、知識や技能を身につけながら指導・支援に向かっていく必要がある。さらに、日本では明確な学問対象になっていないが、ギフテッド（特別な才能を持った子ども）や2E（二つの例外）のある子どもへの指導・支援についても取り組まなければならない。最後に、教育の情報化の流れに伴い、学習指導要領の目標と内容も影響を受ける可能性がある。教育の情報化による教育方法の大きな転換への対応が求められる可能性がある。

（文責M1 福井謙一郎）

2011.
8.18



自由に広く学び合うコミュニティ

3人からの話題提供、3人からの基調提案、そして自由討論

話題提供 (9:30 ~ 11:00)

鈴木亜沙美／長崎大学大学院教育学研究科院生

松本 幸子／長崎大学大学院教育学研究科院生（長崎市立西浦上中学校教諭）

汐碓 美穂／長崎大学大学院教育学研究科院生（長崎県立長崎南高等学校教諭）

綿巻 徹／長崎大学大学院教育学研究科教授

柘植 雅義／国立特別支援教育総合研究所教育情報部長、上席総括研究員

寺田久美子／雲仙市立愛野小学校教諭

基調提案 (11:00 ~ 11:30、12:30 ~ 13:30)

自由討論 (13:40 ~ 15:00)

基 調 提 案

障害児心理・指導法を担当する一教員からみた特別支援教育の課題と展望

長崎大学大学院教育学研究科教授
綿巻 徹

米国の学習用図書の内容構成面の特徴は四つ挙げられる。一つ目はABA（応用行動分析）が指導法の基本とされている点、二つ目は日本ではあまりなされていないスタディスキルの指導、試験を受けるスキルの指導がなされている点、三つ目は成人期の適応行動、学校から社会・職業への移行の支援が強化されている点、四つ目は学習障害、軽度知的障害の児童生徒に対して、メタ認知方略の指導が重要な役割を担っている点である。また米国における障害教育の動きとして、①頻回な事中形成的評価②リサーチに裏付けられた効果的指導③支援環境の調整の三つを結合させた通常学級での指導の工夫、個に応じた指導の三つがある。



最後に予防と支援の強調としては、読み障害が学習障害の主問題領域の一つであるとして、幼稚園から小学校3年生までの予防教育が重要になっている。また、2013年に公刊がアナウンスされているDSM-5では、自閉症、アスペルガー障害を含む広汎性発達障害は自閉症スペクトラム障害とされ、その重症度が、その個人の支援のレベルに対応して三つに分けられる予定になっている。このように、診断基準の操作的定義と病態の現象学記述に力点を置いたDSM-5も、支援を視野に入れたものへと姿を変えようとしている。

（文責M1 村崎良平）

幼稚園・小中学校・高等学校における特別支援教育の到達点と展望

国立特別支援教育総合研究所教育情報部長
上席総括研究員
柘植 雅義





基調提案 討論のまとめ

今回、①授業のユニバーサルデザイン化 (UD)、②米国での人格指導、③二次障害 (非行) の予防、④通級指導の中での教科の補充、の4つの観点について討論が行われた。参加者の関心が特に高かったのは UD であり、その具体的な内容について多くの質問があった。UD をうまく利用するためにはその「限界性」と「可変性」を教員が具体的にイメージできていることが重要であるとのことだった。また米国が障害児の行動に対するアプローチを重要視している一方で、人格指導はどうなっているのかという質問もあった。それについては米国に「人格教育」なるものは存在しないとされた上で、生活に必要なスキルをドライに教えることで、心がそれに追従するという考え方をしているとのことだった。討論全体を通して、従来の特別支援教育に欠けている要素についての指摘・質問が多く、また教員側の傾向として、効果的な指導法の需要の高まりが見られた。(文責 M1 福井謙一郎)

基 調 提 案

今回の特別支援教育の現状と展望を述べていく。これまでの筆者の取組には、主に八つある。①コーディネーターの指名、校内委員会設立等の校内支援体制の確立 ②リーフレットの作成、カウンセリング等の保護者への啓発、対応の仕方 ③環境・支援形態等の児童への具体的な支援 ④特別支援学校、医療機関等の他機関との連携 ⑤教えて考えさせる授業をベースにした特別支援教育を見据えた授業改善 ⑥チェックリスト・Q・U・WISC III等を用いた児童理解のためのアセスメント ⑦多層指導モデルMIM (特殊音節の指導) の導入 ⑧担当と担任が連携を図り、児童への効果的な支援を行うための通級指導教室の有効な活用である。また、児童がつながり合うことができる活動も、①「教え時」を大切にすた教師の連携 ③つながり合う学級にすること、の三つに取り組んだ。これらの取組の中で、筆者が重要だと考えたのは、教えて考えさせる授業と特別支援教育のコラボレーションである。どの子どもも「学級のみならず勉強をしたい。わかりたい。」というニーズがあり、気になる子どもが理解できる授業は、クラス全員につながるいわば授業のユニバーサル

小学校の特別支援教育の現状と展望
 寺田久美子

デザインなのである。この指導法をベースにし、全教師の理解の獲得も目指し、算数の授業で試みた。結果として、知識・技能の習得がスムーズにできたこと、その習得率が平均七割ぐらいであったこと、学習意欲の継続が図られたことが得られた。しかしユニバーサルデザインの要素を、認知特性を見据えた教材の提示の工夫をはじめとした基本的なものとしたため、授業そのものに深まりがなかったように思えた。一方、国語の授業のユニバーサルデザイン化にも取り組んだ。国語科におけるユニバーサルデザイン授業とは、本質的な学習内容を取り入れた授業だと私は考える。つまりそれは学習指導要領の指導事項をどう教材に落とし込んでいくかということである。そして、指導過程の「教える」段階で、教材化や教材の提示の仕方を工夫し、そうすることで子どもの「学びたい」意欲につながるものである。最後に、授業改善は、一人でも多くの子どもたちに「教育の光」を当てることでもある。我々教師は、日々の授業から特別支援教育を推進していき、すべての子どもが、生き生きとつながり合う学級の中で自分らしく生きていけるようにより一層の充実を図っていきたい。

寺田久美子

話 題 提 供

ユニバーサルデザインを取り入れた国語科授業づくり

長崎大学大学院教育学研究科院生 鈴木亜沙美

平成 19 年度より通常学級においても特別支援教育が本格的に実施され、個に応じた指導の充実が求められるようになった。個別指導はもちろん必要であるが、まずは一斉指導の中で特別な支援を必要とする児童を含めた学級全体に対する授業づくりを目指したいと私は考え、小学校国語科におけるユニバーサルデザイン (UD) を取り入れた授業の有効性を検証する。

私は授業の UD とは、「支援を必要としている子どもへの配慮から学んだ支援を、できるだけ目立たない形で取り入れた、学級全体のための一斉授業のデザイン」であると考えている。授業作りの構想として、UDL@CAST の学びの UD の 3 原則の「子どもにわかりやすい多様な手段による情報の提供」に重点をおき、更に桂 (2010) の提唱する「授業の焦点化 (ねらいや活動を絞る)・視覚化 (見える形にする)・共有化 (シェアする)」を授業作成の軸とし、長崎市立 X 小学校第 2 学年にて『スイミー』(光村図書)の第 4 場面 (スイミーが新しい仲間を見つけ、マグロを追い出す策を考える場面)の授業を実施させて頂いた。本時における焦点化は「スイミーが何を何のために考えたのか、に絞る」、視覚化は「スイミーの

の 5 つの行動の流れが文カードを用いて一目で分かるようにする」、共有化は「スイミーの 5 つの行動の内容をペアワークで考える時間を設ける」である。実施前にアセスメントとして行動観察、記号選択式の事前テストを行った。実施にあたっては、授業前半でアセスメントの結果を取り入れ、設定場面・行為の順序をおさえ、後半で問題・話の結末をおさえる構想で行った。文章には明示的な部分・非明示的な部分がある。実施後の授業検討会では、教師の問いがそのどちらを聞いているのか児童がわからないまま授業が進んだことが課題としてあげられた。以後の実践授業では、設定場面・行為の順序を、問題 (焦点化される場所) への手だてとして時間をかけずに行う。

中学校における学校支援体制の確立に向けての取り組み

～特別支援教育コーディネーターとしての平成 19 年度からの実践をもとに～

長崎大学大学院教育学研究科院生 (長崎市立西浦上中学校教諭)

松本幸子

1. 中学校における特別支援教育の推進について
特別支援教育はまず小学校において充実が図られ、中学校はそれに若干遅れながら進んできた。中学校における推進は教科担任制か





生徒の学級適応感を高める学級経営についての一考察

子ども理解・特別支援教育実践コース (佐世保市立崎辺中学校) 箱崎史朗

■KEYWORD 不登校、学級経営、学級適応感、Q-U
本実践研究では、不登校傾向あるいは不登校の生徒を含め、全ての生徒の学級での適応感を高めるような学級経営の手法を探る。方法として、Q-U、学級担任による『楽しい教室プラン表』(H20 千葉市教育センター研究紀要第16号)のチェック、『ソーシャルスキル尺度』(上野一彦・岡田智 2006)による対象学級のアセスメントを行い、重点的に取り組む学級経営項目の優先順位を見立てる。そして、その学級に応じた適切な支援・具体的な手立てを講じるためのヒント集を作成する。作成に当たっては、SGE、SST、アサーショントレーニングなどの体験的な活動をできるだけ取り入れる。このヒント集を学級経営に活用することにより、生徒の学級適応感を高めるとともに、その対応の有効性を明らかにしていきたい。

遊び介入教育についての研究

子ども理解・特別支援教育実践コース 中島和彦

■KEYWORD 遊び、学級づくり、授業

私は、学校生活の中心に子どもたちが好きな「遊び」を置く遊び介入教育をテーマに研究を行っている。これまでの研究では、「遊びを通した学級づくり」を目指して、Q-U調査から明らかになった友人関係の希薄さや、ルールの不確立といった学級の問題に対し、週2回全員遊びの中で、友人と関わり合う遊びの実施やルールを守りながら遊ぶ取り組みによって、この問題を解決しようと取り組んでいる。また、これからの実習では、学級づくりの研究の継続に加えて、長崎県が推進している「教えて考えさせる授業」の中に「遊びの要素」や「遊び」を取り入れ、子どもが意欲的に学習に取り組めるような授業づくりに取り組んでいきたいと考えている。授業のどの過程でどのような活動が効果的と考えられるのか、それによって子どもにどのような影響があるのかなどについて実践を通して学んでいきたいと思う。

教員研修・参加体験型研修の企画運営についての研究

学校運営・授業実践開発コース (県立西陵高等学校) 藤 修

■KEYWORD 研修、体験学習、ワークショップ
本研究は、教員の資質向上のためのより効果的な研修の企画と運営について、①体験ラボ(学生対象のワークショップに関する研究会)の実施 ②連携協力校における教員研修の成果とまとめ ③優れたファシリテーター(熟達者)によるワークショップの質的・量的な分析、の3つの柱で研究を進めるものである。中間発表では、体験ラボ「ワークショップ&体験学習法」ラボラトリーの実践について教員養成プログラムの開発のための企画運営について報告をした。研修を企画するためには、「コンセプトを固める」⇒「プログラムの方針・型を決める」⇒「プログラムの詳細をつくる」⇒「開催準備をする」という、それぞれの段階で準備を進めていった。プロセスデザインや開催パンフの実際を示し、開催後の受講者の評価についてふりかえり記述を基にした談話分析により、その効果についての検証も行った。

初等教育課程キャリア教育の実践実習における考察

～マッピング及び能力調査の提案～

学校運営・授業実践開発コース 内野大介

■KEYWORD マルチ能力、イメージマップ、キャリア教育
これまでの実践実習では間接的キャリア教育をテーマに研究を行った。その方策として、「マルチ能力に基づくアンケート」及び「イメージマップ」を実践した。前者のねらいは児童に潜在的な能力を見出す機会を設け、自己肯定感を高めることである。一方で、後者のそれは、自身の好き嫌い・興味関心のある事柄等、自己分析の場を設ける事で、顕在的な部分を再認識するためである。双方を行い、児童自身の視野拡張が達成され、中等教育以降に実践されるキャリア教育に円滑な接続ができると期待している。そこで、今後の課題として、今回の方策の結果を各児童の学校生活にリンクさせることが早急の課題だ。指導の場面で、今回の結果を意識した指導を行うことで一層、児童の視野拡張と深まりを実現させていきたい。

ねりあいによる子どもの学びの高まり

～子どもの高まりと授業過程を関連させたねりあいモデルの提案～

学校運営・授業実践開発コース 野口亮介

■KEYWORD 協働学習、ねりあい、国語科文学教材
ねりあいとは授業において教師の発達の介入(teaching&caring)によって子どもが自らの意見を明確にし、そして差異を媒介とした協働学習を発展させることである。また、高まるとは、差異を媒介した協働学習からそれぞれの児童生徒が自らの意見と考えを持つことである。その際、教師の介入は相対化され、相対化した意見となる。私は、本研究では、小学校の国語の授業を中心に教師の発展的介入と授業における児童のねりあいの過程、そして授業による児童の高まりを研究している。ねりあいの国語の授業では、子どもはまず教材と出会い、自分なりの解釈を持つだろう。その後、主題にせまる中でその解釈から子どもは一旦離れる。そして再び、教材に対して自分なりの思いを持つと、子どもの考えは広がっているだろう。今後の研究計画は、この3段階の差異を媒介とした読みの高まりの理論をもとに授業を行い、その教育的効果の検証を行っていく予定だ。

科学的思考力を育む授業の工夫

理科 ICT・教育実践コース (県立長崎南高等学校) 近藤 潤

■KEYWORD 高校化学、科学的思考力、単元最初の実験
科学的思考力を育てるための高校化学授業の工夫を考える。今回は単元最初に実験を行い、その後実験内容を振り返りながら授業を行うことで次の効果をねらった。①学習内容に対する興味・関心が高まる。②具体的な物質や現象に基づく科学的な思考活動が促進される。③特別な実験のまとめ等を必要としないため授業時数の確保ができる。

実践の結果は、普段の授業に比べ生徒からの質問が多く、授業の実験を振り返る場面では生徒どうしが話し合ったり積極的に発言したりする姿が見られるなど、これまでと異なる授業の雰囲気うまれた。また、定期考査の科学的思考力を計る問いでは、統制群との間で有意な差はみられなかったが、以前のテストでは統制群の平均点が高かった(統計的に有意)こと、いずれの問いも実験群の正答者が多かったことから、十分ではなかったにしても今回の取組に一定の成果があったと考えられる。

科学的思考力を育成する授業づくり

理科・ICT教育実践コース (波佐見町立波佐見小学校) 根津正二郎

■KEYWORD 科学的思考力、理科授業、中学校
私は現在、生徒の科学的思考力を育成する理科授業を実践するための研究を行っている。「科学的思考力」に着目したのは、自分が行った過去のテスト結果の分析や自分の過去の授業における生徒の姿を振り返ったとき、生徒の科学的思考力の育成については十分な指導ができていなかったという問題意識を持ったからである。この問題を解決するために、今後は、次のことについて取り組みたいと考えている。①過去のテスト点数の分析では、3年次で「知識・理解」とともに「科学的思考」の点数が上がっていたので、「知識・理解」と「科学的思考」との関連性について、詳細に調査する。②生徒の実態に基づき、「実験を行う際の『予想』活動」、「実験・観察の『結果のまとめ』と『考察』活動」、「考察等の『発表』活動」を、生徒が積極的にを行う場面を授業の中で作り、生徒の科学的な思考活動を促す。

理科学習における話し合い活動の活性化

理科・ICT教育実践コース 東 貴宏

■KEYWORD 話し合い活動、中学校理科

これまでの教育実習における理科授業観察や理科授業実践で、生徒による話し合い活動がうまく行われていない状況が見られた。さらに、昨年10月の教育実習において話し合い活動を取り入れた理科授業を試みたが、活動を上手く機能させることができなかった。このような現状および自分自身の反省をもとに、現在言語活動の充実が求められている背景を踏まえ、話し合い活動を上手く機能させるための手立てを明らかにすることを本研究の目的とした。今年6月の大学院実習において「課題の精選」「課題の明確化」の2つに工夫を凝らし、再び話し合い活動を取り入れた理科授業を試みた。活動全体としては昨年と比べて円滑で積極的であったが、自分の考えを積極的に述べたり、相手の意見を積極的に聞いたりと話すといった話し合いの本質部分に関してはまだ課題が見られた。今後は発言の質や方法に関する手立てに重みを置いて研究に臨み、話し合い活動の更なる充実を目指したい。





英語授業における語彙指導の実践について
～語彙情報の多元化による語彙定着を目指して～

国際理解・英語教育実践コース 平山陽子

■KEYWORD 英語授業、語彙指導、語形成情報、語彙の結束性

語彙は言語の中核的構成要素であり、「コミュニケーション能力」を下支えする最も基本的要素の一つでもある。その重要性が再認識される一方、英語教育現場において、語彙指導は省略される傾向にあり、体系化に至っていない。生徒の語彙の定着を助ける指導法について、明確な知見が必要とされる。よって、本実践研究では3つの研究課題を設定する。即ち、語彙情報が多元的に与えられた群と与えられない群を比較した際に、①既習語の意味を問われた場合、正答率に有意な差が見られるか ②未知語の意味を問われた場合、正しい定義にたどり着く確率に有意な差が見られるか ③一定の時間後、語の定着度に有意な差が見られるか 以上の課題を検討し、その分析結果を今後の指導の手がかりとしたい。

生徒の積極的言語活動を引き出すための教室英語の工夫について
～現状分析を見据えた課題と展望～

国際理解・英語教育実践コース 谷本麻希

■KEYWORD 音声言語、教室英語、インプット

「コミュニケーション能力」と聞くと、話すことや書くこと（アウトプットスキル）に目を向けがちであるが、コミュニケーションの基本は、まず相手のメッセージを受け取り理解すること（インプットスキル）である。言語習得の理論から見ても、アウトプットの能力は十分なインプットの上に成り立つものであるということは明らかである。また、新学習指導要領により、英語科では①英語でコミュニケーションを行う機会を充実すること ②授業を英語で行うよう努めること ③日本語を交えて授業を行うことが注目されている。その一方、授業を英語で行うことに伴う困難点も多く指摘されている。しかしながら、英語科教育はこの転機を活かし、伝統的な指導である和訳読解を中心としたものから変化を遂げることが期待されていることになる。そこで、本研究では教室英語に着目し、教師の英語の発話について現状分析を行う。

中学校英語教育におけるリスニング指導

国際理解・英語教育実践コース 藤本健太郎

■KEYWORD リスニング、ディクテーション、リピーティング

今回、聞く、話す、読む、書くの4技能の中で聞くことについて着目した。コミュニケーションの際に、話す力に長けていても相手の主張が聞き取れなければ会話は成立しない。では、教育現場におけるリスニング指導の実態はどうであろうか。実際は、内容が理解されているかどうかを確かめるための問題を解くことにとどまっているのではないだろうか。得点に着目するテスト形式の聴解訓練では、リスニング力の向上にとって限界があるのではないだろうかと分析した。本研究では、生徒の学力実態に応じた音の変容現象に関する音声学的な指導を施し、ディクテーション（聞こえたことの書き取り）とリピーティング（口頭での発音練習）でトレーニングを行う。検証方法は、事前テストと事後テストの結果を比較して得点の伸びを分析する。



長崎大学 教育学研究科 教職大学院ニュースレター No. 5 2011年10月15日
問い合わせ先

長崎大学教育学部：〒852-8521 長崎市文教町1-14
TEL (095) 819-2263 (総務係) (095) 819-2266 (学務係) FAX (095)-819-2265

